

# 『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉉脈』を読み解く(一)

—ランバス・ファミリーの学校の連関構造—

## 福井幸男

### 1 はじめに

私は二〇一二年から二〇一三年にかけて、商学部の『商学論究』に三本の拙稿を論じた。「関西学院大学商学部の源流を探る(1)―貿易港神戸の発展と人口爆発―」(60巻1/2号)、「関西学院大学商学部の源流を探る(2)―貿易港神戸への企業進出、神戸市三大事業そして高等商業学校の登場―」(60巻3号)、「関西学院大学商学部の源流を探る(3)―一九一二年創設の関西学院高等学部商科の理念と現実―」(61巻3号)である。また、二〇一四年に刊行した『世の光たれ! 関西学院高等学部商科開設一〇〇周年記念誌』の編集委員長を務めた。すべて、関西学院の経済学関連、商学関連の分野である。

商学部二〇一六年退職前に神田健次氏のご高著『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉉脈』(関

西学院大学出版会、二〇一五）の多角的な分析に魅せられて一読したものの、精読の機会を失した。時が過ぎ、漸く再挑戦した次第である。挑戦した理由は五つ。①関西学院の歴史全体を見渡す幅広い視点に魅力を感じたこと、②社会的な視点が広く、しかも内容が地に足着いていること、③常にわかりやすく書かれていて、勿体ぶった理念の空回りがなく、そして④私のような素人の要約とコメントも少しは母校学生への今後のキリスト教教育に役に立つかもしれないという期待、さらに、⑤最近、学院史編纂室の池田裕子専任主管からグエン・ノーマンの英文文献を紹介されて閲覧する機会を与えられ、神田氏の論点を補強すべき箇所を見出したからである。書評とする時期を逸したことに加えて、上記が、「読み解く」とした理由でもある。

一点、断っておくべき点がある。本書の内容の多くは、おそらく印刷スペースの制約で、あとがきに示される既発表された諸論考を縮約あるいは割愛したものが多くと思われる。この点で私の不行き届きにより、コメントに不都合な箇所があるかもしれないことをお許しいただきたい。

執筆にあたり思い出したことがある。二〇年ほど前、第二研究棟廊下の立ち話で、柚木先生が「神戸の小さい私塾がこんなに大きな学校になって」（柚木学・元学長、近世海運史の研究で一九八二年学士院賞）としみじみと語られたお言葉は忘れられない。あの年代の卒業生はそういう観念を持っていたと思うと、余計に忘れられない。

アメリカ南メソジスト教会から派遣されたランバス父子（父 J.W.Lambuth、子 W.R.Lambuth）が神戸居留地四七番（現所在地・グッチ神戸大丸）に立ち上げた、小さい小さい学校は、三五番（旧・中山手通四丁目三五番地、現・兵庫共済会館の南隣地）に仮住まいした後に晴れて関西学院として原田の森に設立され、中学部、神学部、文学部、高等商業学部を擁立した（本書第

一部)。

その後、大学昇格を目指して上ヶ原に移転、念願の大学昇格に結実した。これはカナダ・メソジスト教会から派遣されたベーツ (C.J.I. Bates) の剛腕であり、彼の識見と彼が集めた知的エリート(多くは海外での学位取得者や東京帝大出身者で、東京高商出身は会計学の木村禎橋のみ)の實力であつたらう。神戸も東京からみれば都落ちということ、西隣に一九〇二年に新設された神戸高等商業学校の水島鍔也初代校長の教員採用や高商運営の手腕努力が今なお語られるように、本郷の中央公堂に集まつた帝大の出身者を選抜して、水島に勝るに劣らない教員選抜の人脈とさらなる大学昇格実現への行政的な實力を見せたのがベーツである。彼の声望はマスターリー・フォー・サービスのモットーとして語り継がれている(本書第二部)。

## 2 本書全体の流れ

### 2-1 アメリカ・メソジスト監督教会と南メソジスト監督教会の財政比較

まず、最初に指摘すべきことがある。それは南メソジスト監督教会がアメリカ・メソジスト監督教会に比して財政的に貧しかったという歴史的事実である。南部一州は奴隷三五〇万人を含めて九〇〇万人、北部二三州は二二〇〇万人、しかも奴隷による綿花プランテーションなどの「農業を主とする諸州が、工業資源はいうまでもなく、農業資源においても富み、その上西部の鉞山の金銀をもあわせもつ北部の諸州に対抗しての死闘を展開」<sup>1)</sup>しても、まず勝ち目はなかった。しかも、南北戦争の戦場は南部諸州に限られ、戦争による荒廃は大きかった。

表 1 南北両メソジスト監督教会の財政力の比較

	献金		宣教師支援金	
	north	south	north	south
1919	4694	1539	18331	6160
1939	5767	2136	24967	10930

注) 単位1000ドル, Gray(1964), Table 1, Table 2

次の表1は一九一九年の南北両教会の献金および宣教師支援金の総額を示す。ランバスが来日して約三〇年の月日が経過しているがおおよその傾向は掴める。南メソジスト監督教会の財政規模はいずれも、つまりアメリカ・メソジスト監督教会の約1/3にとどまる。南メソジスト監督教会の日本進出が他の教派に比して遅れた理由の一つが財政的な問題であったと思われる。アメリカ・メソジスト監督教会が青山学院を設立したのは早くも一八七四年である。また、関西学院と同じく、アメリカ南部に拠点を置く南部バプテスト教会が福岡に西南学院を設立したのは一九一三年である。

## 2-2 本書の概要

二部構成であり、書名タイトルの前半が第一部「W・R・ランバスの使命」、後半が第二部「関西学院の鉅脈」である。第一部第三章は中国現地調査として貴重な内容であり、ランバスの中国の足跡を丹念にフィールドワークしたものである。著者の探求心を称えたい。それにしてもランバス先生の上海での墓が文革の混乱のなかで失われ、いまだに行方不明であるとは<sup>3)</sup>。

第一部がランバスの足跡をたどったのに対して、第二部はその後の関西学院の発展を、ベーツの働き(第一章)、民芸運動(第二章)、暁明館(第三章)、戦前の神学部教育と朝鮮半島からの留学生の動向(第

四章)、戦後の神学部同窓の海外での活躍(第五章)で跡付ける。著者の研究の守備範囲が極めて広いことを窺わせる。

第Ⅱ部全体を通じて、ベーツの貢献と影響が実に大きいことを知ることになるのは私だけではないだろう。財政的に窮した南メソジスト監督教会に助け船を出したのがカナダ・メソジスト教会であり、その代表の一人として関西学院に送り込まれたのがベーツである。

なお、第Ⅰ部と第Ⅱ部を通じて、各章の最後にコラムがつけられており、その話題の幅が実に広い。広島・庄原の「売店ランバス」、上海でのランバス、銀座のウエンライト記念ホール、ベーツの河上丈太郎(後に社会党委員長)スカウト、民芸運動のかかわりでの寿岳文章と外村吉之介、神学部の韓国留学生の母国での活躍、広島における谷本清の被爆者援護など、コラムの内容の幅に社会的な広がりがあり、読者の興味を引く有益な情報を与えており、宗教色に偏らない構成としている。広島については平和教育について学院が反省すべき土地であること、また壽岳がダント『神曲』のイタリア語原文を参照しての高名な訳者であり、共に関心を強める契機となった。

### 3 第Ⅰ部の概要

冒頭に「時間的・歴史的な考察は必須のアプローチであるが、同時に空間的・地理的な考察が伴わなければ、当時の宣教の力動的な軌跡を十分に理解することはできないのではないか」とある。この試みは成功している。見事なストーリー展開であろう。瀬戸内海の宣教サーキットの概略(第一章)、そこで建てられた教会と学校(第二章)、上海の宣教サーキット(第三章)そして

英国・エディンバラの宣教会議で輝いたエキュメニカル運動の見解（第四章）と続く。

第一章の「ランバスの瀬戸内宣教圏構想」、および第二章の「南メソジスト教会によって創設された教会と学校」は日本国内、第三章の「中国におけるW・R・ランバス宣教師の足跡を求めて」は中国およびシベリアでの宣教活動の概況を示す。そして最終章である「草創期のエキュメニカル運動とW・R・ランバス」は、当時としては先進的なランバスの宣教の思想の基盤を説明している。この解説は優れている。彼は日本、中国のみならず、キューバ、ブラジル、コンゴまで宣教の足をのびた。まさしく、地の果てまでという世界伝道の根本精神の背景をエキュメニカル思想により説明している。この思想の基盤には「教理は分裂させるが、奉仕は一つにする」<sup>(5)</sup>があるという。エキュメニカルの訳として世界教会一致と訳される場合があり、教派を問わず結束するという意味のようである。

なお、本来ならば第一章から読み解くべきであろうが、解くべき論点をいくつか残してしまつたこともあり、本稿では、第二章「南メソジスト監督教会によって創設された教会と学校」の学校についてのみ論じる。

#### 4 ランバス・ファミリーが関係した学校

関西学院、聖和大学、パルモア学院、広島女学院、啓明学院の五校である。本書では要点のみ簡潔にまとめられているので、多少の説明を加えて、各校の学校史を可能な限り参照して、地図を交えながらランバス・ファミリーと称される各校のランバス・ファミリーたるゆえんを相互連



移転し、跡地に頌栄幼稚園・同保母伝習所が移転。

関連の学校史を語るうえで、山本栄一学院史編纂室長によるモース・サイトウ（パルモア学院理事長）の聞き取り記事は貴重である。アメリカ人の宣教師自身の証言であるからだ。また、ランバスの母であるメアリー（Lambuth, Mary Isabella）にも注目しつつ発展の歴史を補強したい。本書と同時期に刊行されたために参考文献として取り上げられなかった『THY WILL BE DONE 聖和の二二八年』（二〇一五年刊）も重視する。それまで、関西学院側からはほとんど語られることがなかった聖和の前史を詳細に語り、かつ学生に対するあふれる愛情を感じさせる銘品である。理事長や学長を並べ立てた旧来の学校史ではない。学生、卒業生の立場に寄り添った学校史としては我国一級の作品であろう。執筆者本人が納得して書いている点がすばらしい。『パルモアメッセンジャーパルモア学院創立一二〇周年記念号』、『Sixty Years of Memories 1983』からも従来語られなかった側面を知ることになる。関西学院史にはなかった魅力、つまり関西学院自らを自ら語るのではなく、他人に語ってもらうという観点にひきつけられる魅力がある。関西学院卒業生としてみると、聖和大学、パルモア学院、啓明学院のそれぞれの校史で語られるストーリーに新鮮な驚きと学ぶべき価値がある。最後に、私の個人的な経験を交えて論じたい。

#### 4-1-2 パルモア学院昼間男子部が関西学院となる

現在、県庁前に聳える神戸栄光教会の歴史は一八八六年七月二五日に来神した父J・W・ランバスの祈りから始まった。パルモア学院は「一八八六年（明治一九年）一月、W・R・ランバスにより神戸居留地四七番地に設立された読書館（Reading Room）を前身とする<sup>(7)</sup>」。ここは当初

はランバス一家の住居を兼ねていた。父親が始めていた英語塾に、ランバスが読書館を設けた。

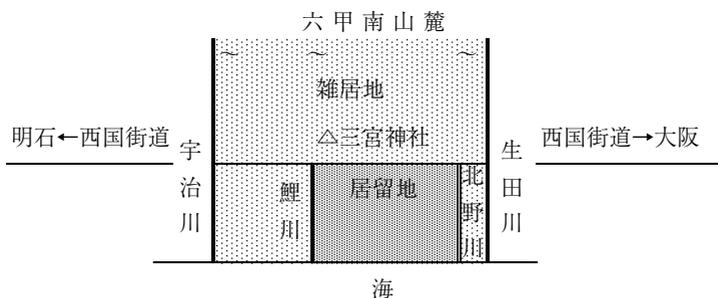
この年、『明治三三年兵庫県統計書』によれば、神戸居留地に現住の欧米人数は二七三、イギリス一四四、ドイツ四二、アメリカ三七、フランス一二、その他三八。この三七人の中に四月に來神した父親J・W・ランバス夫婦に加えて本人夫婦が含まれていたことになる。翌年一月にミズリー州スプリングフィールドのバルモア牧師が訪問し、一〇〇ドルを寄付、今後も毎年同額を寄付することを約したので彼の名前に因んでこの読書館をバルモア学院と命名<sup>8</sup>。

架空の話で恐縮であるが、これを仮にランバスの名を冠していれば、その後のランバス・ファミリー関連の学校の歴史的な経過の整理が易く誤解も少なく、関心も薄れず、理解がより容易になっただろう。ただ、当時としては一〇〇ドル（現在の価値で二〇〇万円から四〇〇万円の範囲）は相当な金額ではあった。

実は一八六八年の開港にあわせた神戸居留地築造が遅れたために、來日した外国人は周辺に借家住まいを強いられることとなった。イギリスは幕府の旧海軍操練所（後に操練所建物は湊山小学校校舎に転用）、フランスは生田神社に領事館を置いていた。初代兵庫県知事となる伊藤博文はやむを得ず一部の周辺に雑居地を設定し、日本人と外国人が混住することを暫定的に認めた。家屋の貸し借り、土地の売買も永代借地の名目ではあるが実質的に認められた。

図2は、当時の外国人の居住実態を示す。居留地の西は鯉川、東は生田川（実態的には生田川右岸堤防下を流れる北野川という水路）、北は西国街道筋、南は海岸までを居留地として定め、雑居地として西は宇治川、北は六甲南山麓までとした<sup>9</sup>。

図2 居留地と雑居地



居留地が順調に築造された長崎にも横浜にも雑居地は基本的に必要なく、長崎と横浜の居留地の面積はそれぞれ一〇万五七七七坪、三四万八一九七坪であり、神戸(四万九六四五坪)の二倍、五倍とあり、十分な広さがあった。<sup>(10)</sup>

翌一八八七年ランバス一家は居留地四七番地が手狭になり、三宮駅(現・JR元町駅)のすぐ北の洋館を借りて移り住む。これが山二番館であり、当時の写真が残る。職住分離はランバス一家に限らない。神戸港を通じた貿易で財をなした多くの欧米人はその後、山の手に広がる北の野原(北野)に豪華な洋館を建てた。たとえばハンター坂の由来である旧イギリス人邸は一八八九年に建設され王子公園内に移築されている。

ランバス一家が移り住んだ山二番館の名称については、①山とは元町から見ての山手を指すようである。だから外国人も「Yama 2 Bankan」とマウンテンと言わず日本語を使って呼んだのだろう。居留地自体から出た言葉よりも、むしろ西国街道沿いの神戸村<sup>かんべ</sup>の住人からみでの呼称であったようである。そもそも元町とは native town の訳語で元々の町の意である桑田。<sup>(11)</sup> ②神戸全体で山側に二番目に建てられた洋館 (foreign residence) と云う事で二番館であるとのカフ師 (John

B Cobb) の推測がある<sup>13)</sup>。一九一九年来日し、戦前戦後を通じて長らく教鞭を取ったカブ師は一九七六年のパルモア学院講堂での記念講演で W・R・ランバスが “came back as a bishop of our church and stayed here” であり、父ランバスが “died in this house, still almost exactly where we are standing, where I’m standing tonight” と語り、再三再四この地でこまりかたつ山二番館があった場所で教鞭を取ったことを語っている<sup>14)</sup>。

山二番館の自宅階下を教室として開放して、ランバスは次の新聞広告をだしている。「語学と科学を教授」との大見出しで「今般自宅に於いて英語、ラテン語、スペイン語、物理学、地質学、生理学の教授を始める」とあり、特に要望があれば書き方と図画も教えるし、昼に仕事で出てこない人のために夜学を開くとしている。そして入学希望の諸氏は北長狭通四丁目山二番館アール、ダブリュ、ランバスの元に來たれと呼びかけている<sup>15)</sup>。

ランバスの母親メアリーも山二番館の自宅の階下で家庭塾的に英語(パルモア学院)、聖書、讚美歌を教え、裁縫などのサークルを持つことになった。とくに、神戸港が貿易港として立ち上がり、英語を勉強したい生徒は多数あったが教える先生が足らず自転車操業でついに一八九三年には専任教員が見つからず休校状態 (to be supplied)<sup>16)</sup> となり一八九五年には適切な校長候補も見当たらず南メソジスト監督教会日本部会の年次総会は閉鎖決議を出す。翌日メアリーは “I was responsible to keep Palmore running” と申し出て閉鎖を免れる<sup>17)</sup>。

メアリーについての吉岡の人物評によれば、ランバスのおばあさんと呼ばれていた彼女は、内助の功著しく、上海では中国伝道の夫を支え、現地の何十人も孤児の世話をし、日本では持病の喘息を抱えながら顔色に出さず、忍耐強く家事万端をこなし多くの客人を自宅でもてなした頑

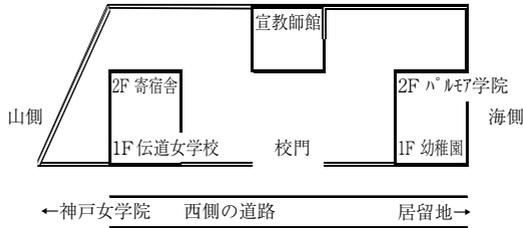
張り屋であったと述懐している。さらに息子のランパスが大人物になったのはメアリーの教育の賜物であり彼女の血を受け継いだとの心境を語っている<sup>18</sup>。孟母三遷の母親であったのである。来日した宣教師夫人のなかでのちに本人の名前を冠した学校まで作り上げたのは彼女をおいて他はないのではないか。

その後のパルモア学院の歴史はメアリーの家庭塾の流れに沿って雑然として、彼女の創設した婦人伝道学校の歴史と交雑して捉えどころがむずかしい。最も信頼できる『一二八年の聖和』を拝読しても掴み切れない。一八八八年から一九二一年にかけての南メソジスト監督教会年報によれば、全体として「無料診療所や看護婦養成、欧亜混血児の学校（筆者注、Day School for Eurasians）、都市の貧困家庭や「女工」たちへの伝道、料理や裁縫学校、夜間の英語学校とバイブルクラス、日曜学校、保育に欠ける子どもたちへの養育、幼稚園、母の会や婦人会、家庭集会などが<sup>19</sup>行われていた。混血児達の写真を見ると、メアリーのいたわりのやさしさと心意気を感じざるをえない。彼女は、女性解放を旗印に、キリストの愛を懸命に伝えようとしたのである。

これらの活動は主として山二番館を離れて、諏訪山の山麓にある神戸女学院の真南五〇mにあり、一八九九年に完成した中山手三五番の校舎（図3参照、現・中山手四一七―一七六）で行なわれていたようだ。パルモア学院夜間部の授業は正門右手の建物の二階の教室であったようだ。一階は幼稚園。正門奥が宣教師館、左手一階は伝道女学校、二階は彼女らの寄宿舎。メアリーが始めた学校は手を広げすぎて身動きがとれず、とくに一九〇一年には婦人伝道者養成学校、欧亜混血児全日制学校、パルモア学院の三事業が主体となる<sup>20</sup>。

現実には南メソジスト監督教会は男子校パルモア学院再建のために、幾つかの手は打ってい

図3 中山手の35番館の見取り図



注) 『聖和80年』の巻頭の3枚の写真から筆者作成

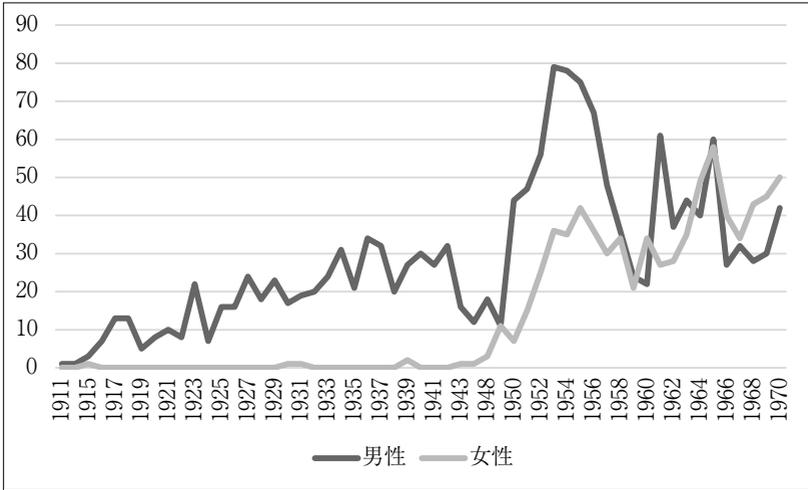
る。一九〇一年にコート師を、その後スチュアート師を送り込んだ。彼の妻の申し出により、かつてランバス一家が住んでいた山二番館の住宅を購入(永代賃貸権付)して、新校舎に建て替える。一九〇八年に間借りしていた三五番校舎を出て(脚注(11) p.16)、移転した。

一九一〇年には、オックスフォード師夫妻が赴任、学院の大改革を成功に導く。実用速記、英文タイプライター、英文書道の教室は人気を集めた。とくに中古の一台のレミントン・タイプライターから始まったタイプライター教室は大盛況となった。教え子の男性がオックスフォード師の書道(Pennmanship)をそっくりまねたので、銀行は持ち込まれた小切手のサインの見分けがつかなくなったという。

終戦後、J3 (Japan 三年任期)として来日した日系二世のモース・サイトウ氏(啓明学院院长兼パルモア学院院长)は、二〇〇六年の山本栄一教授(学院史編纂室長)の聞き取りで、「読書館の本は全て英語だったので、朝から晩まで英語の授業が行われました。外国人居留地が手狭になったため、昼間の男子部」は、山三五番館に移転する。同地はかつて「メソジスト教会の宣教師たちが住み、数校のミッションスクールを育んできた由緒ある山二番三五番館の建物」であった。

続いて「パルモア学院昼間部男子部は、J・W・ランバスの妻メアリー・ランバスによって育

図 4 パルモア学院の男女別卒業生（1912年－1970年）



出所)『パルモアメッセンジャー』同窓会名簿より筆者作成

てられた関西学院となり、・・・外国人居留地を離れた最初の数年間、関西学院の学生数はパルモア学院よりも少なかった」と述べている。おそらくランバス親子は西日本各地への宣教活動に多忙で、居留地にずっととどまることは難しく、しっかり者のメアリーが支えたのであろう。市制・町村制の実施により神戸市が誕生した一八八九年九月二八日、パルモア学院昼間部男子部は原田の森に飛び立ち、関西学院として創設される。

貿易都市神戸の発展に応じて、オックスフォード校長の采配良く、夜間男子校パルモア学院は四年制の実用英語課程を制定し、タイプ科、速記科をスタート。一九一四年には女子の入学を特別に認め、教室は男女別とした。最初の女性入学生である今井姉は日本初の女性公認タイピストとなった。

パルモア学院の卒業生は戦前、戦中ま

ではほとんどが当然のこととして、男性である(図4)。急増する女子の志願に対処して、女子部を本校から切り離したからである。パルモア学院自体は、戦後男女共学となり、卒業者の男女人数は、一九四七年一二(男性)―一(女性)、一九四八年一八一三、一九四九年には一一一―一、一九五〇年四四一七、一九五一年には三六一一六となり、一九七〇年四四一四八と、卒業生は増加し、男女比は逆転していく。<sup>25</sup>有為な多くの卒業生を輩出したのだが、残念ながら英語会話の競合校との競争に敗れたのだろう。最近廃校になった。

#### 4-3 啓明学院

第一次世界大戦開戦の好景気のなかで、神戸に船成金が続出、「女性にも商業教育が必要」との鈴木商店創業者未亡人、鈴木よねの後援で日本初の公立女子商業学校、神戸女子商業(現・市立神港橋商業高校)が元町に一九一七年に誕生する。修業三年の本科、一年の専修科(タイプライター、商業、英語、簿記、珠算、商業実践の六科)としたが、女子実践教育の人気強く、一九二三年には生徒数五六〇人規模となっている。<sup>26</sup>鈴木商店はこの年三井物産を抜いて売り上げ日本一の総合商社に上り詰める。

時代の波は、男子校でありながらパルモア学院にも押し寄せ、タイプ科と速記科への女性志願者が一九二一一―一九二二年期に一二〇名となり、「婦人のための高等学校を作りたいとの進言」<sup>27</sup>が南メソジスト教会伝道部婦人部からなされ、その積極的な支援を得た。この結果、本校から女子を分離独立させ、女子商業学校の色彩を強めることになった。

女子商業学校としての独立色を世間に訴えるには新たに校地を求めなくてはならない。ここに

幸運が舞い込んだ。ランバス記念伝道女学校と併設の幼稚園が一九二一年に広島女学校保姆師範科と合同して、ランバス女学院として大阪上本町に移転することになった。上本町の校舎が竣工し、ランバス女学院は三五番から退去。

空いた校舎にはパルモア学院女子部が山二番館から一九二三年に移転してきた。この機会にパルモア女子英学院と名乗り上げ、一九二五年にパルモア女学院として独立する。当時、外国人日本人各四名の教員体制で英語科一二一名、速記とタイピストの商業科一四四名を担当した。<sup>28</sup>

パルモア女学院は、軍事体制が強まり、校名に外国名を使わず日本名に代えるというキリスト教同盟の申し合わせにより、一九四〇年に啓明女学院と改名、二〇〇二年に啓明学院と改称し発展する。

戦後のベビーブームで入学希望者が殺到し、中山手の三五番では校地・設備が足りず、別に新しい校地を探すことになった。一九六〇年に下山手通二丁目に約五〇〇坪の土地に求めた。そこには戦前から幼きイエズス会が運営していた聖マリア女学校の校地一〇〇〇坪と建物があった。一九五六年の生田区住宅地図では「ECOLE SAINT MARIE」（すなわち聖マリア女学校）と記されている。その後、一九六一年住宅地図では南半分は兵庫県農業会館、北半分を啓明女学院と記されている。北校舎は中学、南校舎は高校が利用した（図1参照）。

啓明学院について補足する。啓明学院の六〇年学園史に卒業生の回顧談がある。「校舎はふたつに分かれていて、クラブ活動や文化祭・体育祭の行事練習のたびに街中を大移動。北校舎は北野の観光コースにあり、申し分なかったが、南校舎は三ノ宮駅から徒歩二・三分の至便な一等地にあるとはいえ、歓楽街のまっただなか<sup>29</sup>」。

明治以降に神戸に進出してきたキリスト教関係の学園は、関西学院だけではない。カトリックの女子修道会「幼きイエズス会」もその一つで、現在の本部は仁川台二丁目にある。一八七七年にマルセイユから神戸に四人の修道女が上陸、当初の事業は居留地裏町での孤児養育<sup>⑳</sup>。その後は神戸下山手七丁目に聖家族女学院（日本人子女の学校、親和学園の旧校地の東隣）と修道院を、下山手二丁目に聖マリア女学校（神戸唯一のインターナショナルスクール）と孤児院を展開していた<sup>㉑</sup>。大阪にも一八七九年に進出し、孤児養育から、信愛女学院に発展した<sup>㉒</sup>。

ところが空襲で神戸の下山手七丁目の校舎が全焼した。被災を免れた下山手二丁目の校舎で聖家族女学校は、終戦後、海星女学校と改称し、しばらく教育事業を続けたが、長崎が原爆の被害を受け、日本人シスター七名が殉職。在校生が卒業するまでは女学校を続ける余力なく、安定的な学校経営続行は不可能として、同じカトリックのマリアの宣教師フランシスコ修道会に教育事業の引き継ぎを要請した。フランシスコ修道会は世界全体でも教育事業にはタッチせず、神戸では外国人のための神戸万国病院（のちの神戸海星病院）の経理と看護の事業など慈善事業に注力していた。熟慮の決断を経て、この申し出を受託し、海星女学院として新しく船出した<sup>㉓</sup>。

しかし、一難去つてまた一難。校地と設備の関係で当時の学校設置基準に合わず、フランシスコ修道会は新制の中学校と高等学校の申請認可ができなかった。ところが、旧関西学院の北側にあつた報徳商業（県立神戸高等商業学校が垂水に移転したのちに進出）が空襲で校舎が全焼、校地を新しく西宮市に求め移転することになった<sup>㉔</sup>。残るは校舎と設備の資金。漸くローマの本部からの全面的な支援を得て、一九五一年に青谷に進出、当初の予定になかった小学校設置については、「小学校

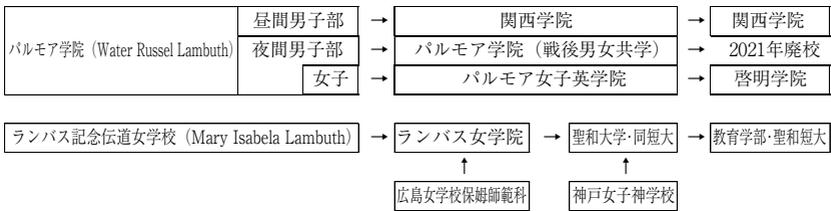
から高校までの一貫教育を行う私学がないので「小学校付設を」との県当局の強い要請を受けて、小学校・中学校・高校一貫教育の神戸海星女学院が発足した<sup>55</sup>。残った孤児院は聖イエズス修道会の京都に移し、聖マリア女学校についても、同修道会の手を離れ、フランシスコ修道会が引き受けて青谷の神戸海星女学院校舎に移転、ステラマリス・インターナショナルスクールと改称し、阪神間の外国人子女を多く集めたが、一九八〇年前後に廃校となった。

下記の図5はランバス親子が創設した阪神間四校の簡略した発展図である。パルモア学院はランバスが読書館から始めた学校で、ランバス記念伝道女学校は母親のメアリーが自宅での女性伝道者養成の働きで創設。

#### 4-4 聖和大学

一九二一年に広島女学校保母師範科とランバス記念伝道女学校が合同してランバス女学院となった。パルモア学院で開催した南メソジスト監督教会ミツション会議での合同決議の理由は「東西処を異にし、一つは直接伝道を、一つは幼児教育を目ざしてきたとはいえ、いずれもキリスト教々役者を世に送り出すという点においては

図5 ランバス・ファミリーの関連学校の見取り図



何の変わる処もなく、…人口二百万の人口を擁する大都市に移転」と意気揚々である。<sup>36</sup>前年の一九二〇年我国初の国勢調査が実施され、人口は大阪府二五九万、大阪市一二五万、神戸市六一万、広島市一六万であった。アジア屈指の貿易港を擁し人口が全国第三位に急伸した神戸市も東洋のマンチェスターと呼ばれた大阪には及ばなかったということだろう。

南メソジスト教会伝道部（テネシー州ナッシュビル）からの寄付金三〇万五〇〇〇円を受けて歯ブラシ工場の跡地など校地面積一〇〇〇坪、瀟洒な全館暖房の鉄筋四階建て・地下一階の校舎を上本町の都心（現・近鉄上本町駅北の大阪社会福祉センター）に建設。竣工を伝える新聞記事の見出しに、（筆者注、ヴォーリス建築事務所による）「禁酒禁煙家達の手で」とある。<sup>37</sup>

広島女学校の保姆師範科はアメリカの従来 of 保育者による画一的な一斉保育を批判して、幼児の主体性を重視する自由保育（クレヨン画、自由切り紙を含めて幼児の自由遊びを主とする保育）を広島で保育実践していた。ランバス女学院保育者養成課程は広島女学校の先進的な性質を受け継ぎ、同校は自由保育の拠点として知られるのである。<sup>38</sup>デューイの進歩主義教育の影響を全面的に受け、コロンビア大学から帰国した高森フジの指導も大きかった。院長の田中貞は「決して象牙の塔に立てこもるのではなく、実社会に出てその要求に応ずるように努力していた」との証言が残る。

ランバス女学院の順調な発展は、一九四〇年に大きな波乱を迎え狼狽する。同年、愛国婦人会大阪支部（支部長は大阪府知事夫人）より子供と婦人のための病院建設に校地を求めたいとの強い要望があり、時局が厳しく、キリスト教教派の合同問題もあり、アメリカからの援助金の見通しも立たなくなり、熟慮の末、一九四〇年一月二月に土地建物譲渡を決定。<sup>39</sup>一九四一年三月に西宮

市岡田山の神戸女子神学校と統合し、「聖なる和合 (holly union)」を意味する聖和女子学院を校名とした。<sup>10)</sup>

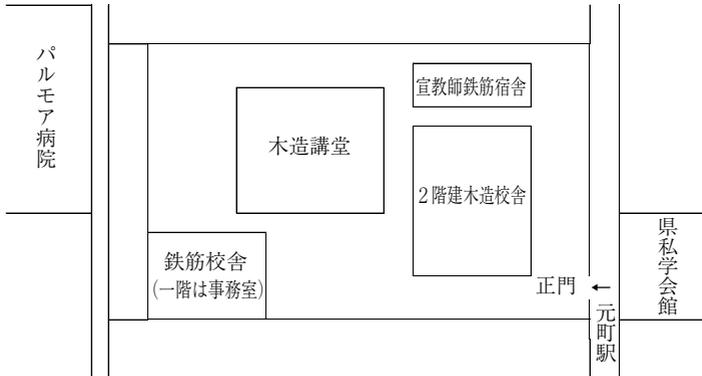
キリスト教旧組合派は伝道師養成のために、男性に同志社神学校、女性に神戸女子神学校を一八八〇年創設した。同校は当初は家庭塾のようなものであり、神戸女学院を設立したミス・ダッドレーと従姉妹のミス・バローズが女学院を辞して花隈に設立、幾多の変遷を経て、順調に発展した。しかし、その後、一九二三年以降、女性宣教師の帰国が相次ぎ、設立母体のアメリカン・ボードが事業縮小を決定し援助金を減額したために、議論を重ねた末、ミッシヨンの指令で中山手五九番（中山手通六丁目一番地、相楽園西門前）の地を同系統の頌栄幼稚園に譲り、神戸女学院（岡田山に一九三三年移転）と関西学院（上ヶ原に一九二九年移転）の連携を取れる場所という条件も考慮して、一九三二年一〇月に岡田山に移転したものである。

## 5 パルモア学院、神戸YMCA、啓明女学院の思い出

私はパルモア学院の夜間部（週五日）の四年制の卒業生である。JR元町駅北の坂を少し上がった西側（山二番館だった場所）にあり、教室は二階建ての木造校舎、L1教室は新築の鉄筋事務棟にあった（図6参照）。敷地の西側には産科で有名だった鉄筋建てのパルモア病院が聳えていた。半世紀以上前の話である。阪神間では英語ならパルモアの定評がある学校だった。芦屋にセイドー、西宮北口に立聖館があった。

パルモア学院は隆盛を誇り、大学生や会社員や公務員、税関職員などが多く詰めかけた。同級

図6 パルモア学院の見取り図（1960年代後半）



生の福井悟や則定隆男がいた。福井は一年で退学してワシントン州の名門ルイス・アンド・クラークカレッジに飛んで同校を卒業後外資系の航空会社に就職した。則定は飛び級を繰り返して二年半で修了し、研究者の道に進み、商業英語学会会長をこなし、母校の名誉教授となった。横山は三菱重工、Nは総合商社に進み、Kはパイロットになった。アメリカの宣教師がたくさんおられて授業時間の間に英語のチャペルがあった。一九〇〇年生まれのMrs.Reed先生から関学紛争について聞かれ“KG authority paves the way for solving...”などと返答して褒められた。

教員の一人にアメリカ人の大柄な女性教員のルース・サイトウがおられ、夫は理事長のモース・サイトウであった。実は、彼女の父親はランバスが韓国やシベリアにまで宣教活動に赴いたときに同行した若手のジェームズ・オリバー・ジュルクス「テイラー」師である。彼女はテイラーの一番下の子供で一九二九年にジョージア州プレインズで生まれている<sup>④</sup>。奇しくもアメリカ第三九代大統領カーターと同郷である。

もう一つ。戦後のベビーブームの一員として、小学校の教室が足りず、私は近くの花園中学校（灘区）の校舎を分校として四年生のときに通学した。終戦後の混乱の中で校舎が全焼したパルモア学院が一時校舎を借り受けていたことをはじめて知った。

次に啓明学院である。学生時代、神戸YMCA（生田神社の西側、現在は税務署と警察署）の高校生クラブのリーダーをしていた。YMCAの西側道路を少し下ると左側に啓明女学院があった。メンバーに、啓明女学院の生徒がいたのでよく記憶している。学院は歓楽街の真ん中にあり、正門から見ると汚れた校舎だった。学院の東にはドーム型キャバレーの新世紀があった。O君、K君、E君の灘高トリオもクラブのメンバーで、京大医学部、東大教育学部、東大工学部にそれぞれ進学した。大手病院の医科部長、R大教授、大手鉄鋼メーカーの幹部となった。私が誘った高等部生の皆見君（経済学部ゼミは小西唯雄先生）は都銀退職後に上場企業等の社外取締役などをしている。最近、彼らと旧交を暖めている。

## 6 まとめ

本稿では全体的なコメントに加えて、ランバスの関係した学校の校史を活用して私の理解の範囲でまとめたものである。この点で『聖和一二八年の歩み』、『Sixty Years of Memories』、『パルモア メッセンジャー』は新鮮であった。また、モース・サイトウは私のパルモア学院での教員であり、より身近に感じる個所があった。同じくカブ師のコメントも貴重であった。次稿では、取り扱えなかった玉章を読み解きたい。

神田健次氏による本書は関西学院の幅広い歴史的研究の優れた啓蒙書であろう。この分野は、他の有力私学に比して立ち遅れてきたと思われる。本書は神田氏が主として二〇一〇年代前半に執筆された論文や諸論考を中心に、これらを整理され、書物の体裁を考慮して練られた貴重な啓蒙書である。拙稿執筆の大きな動機を与えてくださった畏友神田氏に心から感謝する。また、節々で質問に答えてくださった池田裕子専任主管にも感謝申し上げる。また、則定隆男、深山明、神崎高明の各名誉教授ならびに中島俊郎甲南大学名誉教授のご示唆にも感謝したい。

【注】

- (1) チャールズ・ピアード、メアリ・ピアード、ウィリアム・ピアード著、松本重治・岸村金次郎・本間長世訳（一九六四）『新版アメリカ合衆国史』岩波書店、p.272
- (2) Albert L.Gray Jr.(1964):*Methodist Membership and Financial Contributions Before and After Unification, Methodist History*, Vol.3-No.1,p.44
- (3) 神田健次（二〇一五）『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉉脈』、pp.81-82
- (4) 同右、p.3
- (5) 同右、p.95
- (6) 山本栄一・池田裕子（二〇〇二）『パルモア、関学、啓明の始まり〜モース・サイトウに聞く〜』、『関西学院史紀要』第八巻、pp.85-89
- (7) 神田前掲書、p.55
- (8) 池田裕子（二〇一四）「ミズリー州での調査、パルモア、ウェンライト、ヴォーリス」、『資料室便り』No.39、関西学院史編纂室、同氏の突撃取材を称えたい。
- (9) 西川和機（二〇一四）「神戸外国人居留地の水路の変遷〜市街地雑居の進展と黎明期の下水道〜」『居留地の窓から』第九号、p.173。軍艦奉行勝海舟は神戸村庄屋生島四郎太夫の家に旅宿し、後にこの建物は五宮町に移築（生島藤根子（一九八三）『生島四郎太夫と神戸』、p.24）

- (10) 大倉建彦(一九九三)「雑居地の多様な顔」pp.74-75、神木哲男・崎山昌廣編著『神戸居留地の3／4世紀：ハイカラな街のルーツ』神戸新聞総合出版センター
- (11) 聖和史刊行委員会(二〇一五)『THY WILL BE DONE 聖和の二二八年』関西学院大学出版会 p.132
- (12) 桑田優(二〇〇六)「兵庫開港と神戸外国人居留地」pp.13-14、神戸外国人居留地研究会編『居留地の窓から』第六号。
- (13) パルモア学院同窓会(二〇〇七)『パルモアメッセンジャーパルモア学院創立一二〇周年記念号』p.18
- (14) 同右、pp.17
- (15) 脚注(11) p.39
- (16) 同右 p.145
- (17) 脚注(13) p.19
- (18) 脚注(11) p.219
- (19) 同右 p.135
- (20) 同右 p.15および脚注(36) p.198
- (21) 脚注(13) p.20
- (22) 脚注(9) p.86
- (23) 啓明女学院六〇年誌編集委員会『Sixty Years of Memories 1983』p.53
- (24) 脚注(6) p.86および脚注(13)のパルモア学院沿革表
- (25) 脚注(13) pp.42-74。オックスフォード師はパルモアへの回顧録(The Palmore Institute Its History and Work of the Past Fifty Years)の中心、National City Bank of New York(現・ンティバンク)神戸支店は一六人の卒業生、在校生などの働きで回って(run)おり、Dunlop Rubberも四〇人を超える卒業生と在校生が活躍していることに誇りを以て語っている(パルモア同窓会(二〇一二)『パルモア学院の軌跡』pp.9-12)。
- (26) 神戸市役所(一九三七)『神戸市史第二集本編』pp.925-926

- (27) 脚注 (62) p.53
- (28) 同右 p.54
- (29) 同右 p.115
- (30) 大阪信愛女学院 (一九八五) 『九〇年史』 p.11
- (31) 神戸市 (一九六五) 『神戸市史第三集社会文化編』 p.226
- (32) 脚注 (30) p.12
- (33) 神戸海星女子学院記念誌編集委員会 (一九八五) 『神戸海星女子学院短期大学創立三〇周年・大学創立一〇周年記念誌』 p.6
- (34) 同右、p.7
- (35) 同右、p.8
- (36) 聖和八十年史編集委員会 『聖和八十年史』 p.63
- (37) 脚注 (11) p.207
- (38) 永井優美 (二〇二二) 『ランバス女学院附属幼稚園における自由保育の実践―高森富士の保育論に注目して―』 p.364、橋本美保・田中智志編著 『大正新教育の実践―交響する自由へ―』 東信堂
- (39) 脚注 (11) pp.235-237
- (40) 脚注 (36) p.101
- (41) 脚注 (5) p.89

補注

山二番館の洋館は、その後、阪急六甲北の五差路にあるバス停六甲登山口の西に移築された。一九四一年にヒトラーの弾圧から逃れるために数千人のユダヤ人がシベリア鉄道を経て敦賀に上陸し、陸路で神戸に到達。うち二〇人(四月八日報告時点)が「篠原本町一丁目八四の旧ランバス邸に滞在」との外務省外交史料館所蔵報告にある(神戸市編(二〇一七)『神戸市紀要神戸の歴史』第一二六号、p.113)。此の間の事情は『新修神戸市史 生活文化編』(二〇二〇年刊行)の神田健次「第

四章三節二項「神戸のユダヤ教とコミュニティ」に詳しい。山二番館は昭和になってから移築され、外人向け貸家として、その後は、一九三七年設立の六甲学院立ち上げ準備の事務棟として、さらにカトリック六甲教会の神父居宅として使われた（落合重信「山二番館」『教育こうべ』一九七五年五月号）。戦後はお洒落な店として一九七〇年代まで使われた後一九八四年に取り壊されている。